

戦前期の洋楽放送における『国民音楽』形成の一過程～昭和10年前後の番組を中心に～

武田康孝(東京大学大学院文化資源学研究専攻)

本発表は、1934(昭和10)年前後数年間における洋楽放送の分析を通じ、日本人の手による洋楽の形成過程を考察するものである。ラジオというメディアが、当時勃興しつつあった洋楽作曲家たちの意向をどのように汲みとり番組に反映させていったのか、また同時性・広汎性をいう特性を持つラジオが洋楽文化形成の「場」としてどのような役割を果たしていったのかを、放送を取り巻く環境の変化とともに検証してゆく。

洋楽放送は、その成立経緯や専門能力の必要性から、1925(大正14)年の放送開始以来、一貫して囑託や外部委員会など職員以外の手に企画制作の権限が委ねられていた。1932(昭和7)年、制作が日本放送協会職員に移ったが、極めて少ない職員数に加え、長年にわたる外部依存が影響して制作能力の「空洞化」が進行し、洋楽放送の重要性は量・質ともに低下していく状況にあった。

そのような中、1934(昭和9)年5月に日本放送協会の機構改革が行われ、大胆な人事刷新と組織改正によって政府の意向を反映させやすい「中央集権化」「一元化」が大幅に進んだ。この環境変化は、洋楽番組を制作する側に次のような変化をもたらすこととなった。

まず、改正前3人しかいなかった洋楽担当職員が、改正後は年々倍増し人員不足が解消されたことが挙げられる。この背景には、中央集権化を進める上で、組織外の人間の番組へのコミットを排除し「内」と「外」を厳格に線引きする意図があったと考えられる。さらに、政府の方針で「日本精神」を基調とした日本文化の育成が番組編成の中心に据えられたことにより、洋楽による「国民音楽」の創出が盛んに議論されることになったことが挙げられる。これらの動きの結果として、「十分間オペラ」や「現代日本の音楽」「国民歌謡」など、それまでに例のない実験的・意欲的な番組、また作曲懸賞などが次々と企画・制作されていった。

また、これらの動きには、当時活動が活発になりつつあった若手作曲家たちとの協力関係があったことも見逃すことができない。当時の制作者の方針——放送が音楽家に「場」を与え、その場の中で新しい音楽文化が育まれてゆくという「過程」に重きを置く——は、以降多くの作曲家の創作意欲を放送に向かわせることとなった。この時期の洋楽放送は、中央集権化・一元化という変容した放送組織を積極的に活用できる状況にあり、結果として様々な試みと果実をもたらすことになった。その意味で、この時期の洋楽放送は、戦前期において制作者が創造性を最も発揮し得た時期であったといえよう。